

聖書:使徒の働き13章12～25節

説教:神の約束にしたがって

はじめに

今日の所に入る前に前回のおさらいをします。地中海の東端にあるキプロス島に駐在していた地方総督セルギウス・パウロスが福音に興味を示し、パウロを官邸に招いて直接話を聞こうとしました。そのとき、総督のそばにいた魔術師エリマが邪魔をしようとしたので、パウロは聖霊に満たされて彼をにらみつけ、「主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。見よ、主の御手が今、お前の上にある」と言って、エリマの力を封じ込めます。この出来事をきっかけにして、ローマ帝国出身の異邦人であった総督がパウロが語った神のみことばを信じて信仰に入りました。

みなさんはかつて、自分がクリスチャンになるとは思ってもいなかったのではなんでしょうか。それがいま聖書のことばを聞いて信じ、教会に来ています。考えてみれば不思議なことです。信じるのは大変なことのようにも思いますが、いっぽう神は私たちが信じられるようにいろいろな備えをしていることも事実です。今日の箇所、パウロは今度はユダヤ人を相手に福音を語っていきます。ここで彼は何を語ったのか。神はどのような備えをしておられたのか。

1 パウロの説教

1) ヨハネが帰る

ともに見てまいります。その前に13節のこについて一言触れておきます。「ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。」短い文章ですが、なにかただならぬことが起きたかのような雰囲気です。実はヨハネはバルナバのいとこという関係にあり、ヨハネを将来の指導者に育てたいということでした。ところが、今のトルコ領内にあるペルゲという港に船で行く段になって、急にヨハネだけエルサレムに帰ることになった。理由は分かりません。いずれにしても、これは「仲間割れ」というふうにはしか見えませんから、普通なら書かないでおくべきことになるでしょう。ところが聖書は、隠さないでちゃんと載せる。

どうしてだろうと考えます。彼らはどのようにして送り出されてきたのか。そのことを思い出してみましょう。彼らは聖霊に満たされてきました。この働きは人間の業ではない、神の業である。そ

ういう信頼があります。しかしいっぽう、実際に宣教の働きをしている人たちは完全ではない。みな罪人です。たとえ聖霊の働きがあってもトラブルが起こることがある。けれどもそこで落胆しない。今はけんか別れのようになっても、必ず神はこのことを益としてくださる。そのような信頼をもっている。だから包み隠さず起きたことを書れるのです。実際、十数年経ってからパウロは手紙の中で、ヨハネ・マルコを高く評価するようになっていくのです。

2) 旧約を信じる人たちへ語る

さて、パウロに目を留めていきます。パウロとバルナバは、安息日にピシディアのアンティオキアにあるユダヤ人の会堂に向かいます。会堂では、「律法と預言者たちの書」が読まれていました。いま私たちが手にしている旧約聖書のことばです。その旧約聖書に何が書かれているのか。そこには、イエス・キリストのことが書かれている。パウロはそのことを示そうとしています。パウロの説教は41節まで続いていて、今日はそのうちの前半の部分を見ていきます。

2 旧約に記されている救い主

1) 旧約聖書を読むための予備知識

ところでみなさんは旧約聖書を読みやすいと思うでしょうか。創世記や出エジプト記はドラマを見ているようでおもしろく読める。でも旧約聖書全体は、とても難しく一人では読めない。そう思われる方も沢山おられるのではないのでしょうか。それは当然のことだと思います。小説のようなものであればなんの予備知識がなくても読むことができますが、旧約はやはり予備知識があるとならぬとは断然違う。北海道聖書学院では旧約通論という授業があって、そこに一般の信徒の方が聴講で入って学んでいます。教会によっては、礼拝とは別に特別の時間を設けて旧約聖書を学ぶとか、イスラエルの歴史について学ぶようなこともしているくらいです。

でもそんな時間がとれないという方もいるでしょう。難しいことは抜きにして、旧約聖書を読むための簡単で役に立つ秘訣のようなものがあればと思うでしょう。ちゃんとある。ここでパウロが語っていることをなぞっていけばよい。ここに旧約

聖書を読むときに必要な、イロハのイと言っているくらいの基本知識です。

2) イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選んだ

それはなにか。まず17節。「この民イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。」

パウロはキリスト者ですから、会堂に集まっている人たちとは信仰が異なるので、全然接点がないように思いますが、むしろ大きな共通点がある。「私たちの父祖たち」と語っています。会堂に集まっている人たちとパウロには、共通の土台がある。そこからスタートします。

私たちの父祖たち、具体的に言えば創世記に出てくるアブラハム、イサク、ヤコブ、そして出エジプト記のモーセを指します。そのモーセに導かれて荒野で四十年さまよってからカナンに入ります。そのときの様子はヨシュア記に書いてある。20節に「さばきつかさたちを与えた」とあるのは士師記のこと。そして22節。「そしてサウルを退けた後、神は彼らのために王としてダビデを立て、彼について証しして言われました。『わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心になつた者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。』」

士師記の次に第一、第二サムエル記が続きます。そこにはイスラエルの最初の王となったサウルとダビデことが書かれています。このようにパウロは、イスラエルの歴史を手短かにたどりながら、旧約を読むときのポイントを押さえている。非常に参考になります。

3) 神は約束にしたがって

このように旧約のエッセンスをたどって、何を言おうとしたのか。中心は23節です。「神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださいました。」

神はどこで約束したのか。それが先ほど読んだ二重かぎ括弧の所にあつて、いずれも旧約聖書からの引用です。旧約で神が約束してくださったように、ダビデの子孫からイエス・キリストを救い主として送ってくださいました。これがこの箇所の大きなポイントです。この話を私たちは何度も聞いていますから、別に真新しいことではないかもしれな

い。しかし会堂で聞いているダヤ人たちにとっては初めての話です。

ここでちょっと考えてみてください。パウロはユダヤ教徒が慣れ親しんでいる同じ旧約聖書を読んでいます。パウロは、旧約を開きながらここに書かれているとおりにイエス・キリストが来られたと言っています。旧約聖書以外のところからなにか新しい話を引っ張ってきて付け加えてはいない。いっぽう会堂にいるユダヤ人たちも同じ旧約聖書を読んでいる。だったらパウロに言われる前から、イエス・キリストは来たことを認めるはずではないのか。ところが現実にはそうはならなかった。ユダヤ人たちは、救い主はまだ来ていないと主張する。この理解の違いはどうして起こったのか。そのことはまた次回の所で触れることとなります。

3 約束を信じる

1) 旧約の約束が果たされたのなら

今日私たちがここから教えられることは一つです。神は約束にしたがってダビデの子孫からイエス・キリストと呼ばれる救い主を送ってくださいましたこと。そのなかでもっとも大切なのは、「約束にしたがって」というところです。

私たちが持っている聖書には旧約と新約という名前が異なる聖書が二ついっしょになっているので、まるで二つの聖書があるかのように勘違いしてしまいます。そうではない、聖書は一つです。一つですから旧約と新約を両方読みます。もし旧約聖書を読まなかったらどうなると思いますか。新約にはイエス・キリストが救い主として来られたことが書いていますから、新約で十分ではないかと思うでしょう。実際、歴史を振り返ると新約だけでよいと主張したグループも現れて、それは宗教的異端であると退けられたことがありました。どうして新約だけ読んではいけないのか。新約聖書だけ読んでいたら困ることが一つある。なぜイエスが来られたのかわからなくなる。二千年前、羊飼いのところに御使いが現れて「救い主がお生まれになりました」と告げました。旧約がなければ、この世界に突然救い主が現れた。そんなふうになる。でも事実は、突然来られたのではない。神があらかじめ父祖たちに約束して下さっていた、その約束にしたがって救い主が来られた。旧約を読んで初めてそれが分かる。だから旧約も読むのです。

2) これからの約束も信じられる

約束がどうのとか、そんなことはどうでもよい。とにかく救い主が来られたのだからそれでいいではないか、と思うのでしょうか。やはりそうではない。神が約束にしたがって救い主を送って下さった。それが二千年前に実現した。そうであるなら、これからのこと、未来のことはどうなりますか。私たちは地上のいのちに限りがあつて死を迎える。けれども主は再び来られて、私たちに新しいからだを与えて天の御国に迎えて下さる、この約束を私たちはいただいています。もし旧約がなければ、神が本当に約束を果たして下さるのか、私たちには確信が持てなくなるのではないですか。神が私たちの父祖たちに、やがて救い主を送りますと約束してくださった、その事実を私たちは旧約から教えられる。そこに書かれていることを読んで、私たちは確信が持てるようになる。そうだ。神が父祖たちに約束してくださったことを果たして下さったのなら、これから先の約束についても必ず果たして下さるに違いない。

見えないものを信じなさいと言われます。それが信仰ですと言われます。しかし何が何でも力任せで信じなさいと言っているわけではありません。すでにちゃんと神は、私たちが信じられるように証拠を備えておられます。私たちはわずか一歩を踏み出すだけです。これだけの証拠があるのだから、これは信じないわけにはいかない。それくらい近くにある。

神はそこまでして私たちを救おうとされている。この救いのみことばを、多くの人たちに知っていただきたいと願います。